

## 横地分類

「移動機能」、「知的発達」、「特記事項」の3項目で分類し、以下のように表記する。

例：A1-C, B2, D2-U, B5-B, C4-D

E6	E5	E4	E3	E2	E1
D6	D5	D4	D3	D2	D1
C6	C5	C4	C3	C2	C1
B6	B5	B4	B3	B2	B1
A6	A5	A4	A3	A2	A1

〈知的発達〉  
 簡単な計算可  
 簡単な文字・数字の理解可  
 簡単な色・数の理解可  
 簡単な言語理解可  
 言語理解不可

〈特記事項〉  
 C: 有意な眼瞼運動なし  
 B: 盲  
 D: 難聴  
 U: 両上肢機能全廃  
 TLS: 完全閉じ込め状態

寝返り不可  
 寝返り可  
 座位保持可  
 室内移動可  
 室内歩行可  
 戸外歩行可  
 (移動機能)

点からでしょう。  
 このふたつが母性の実体ならば、施設職員がその代わりをすることはそれなりに可能なことだと思います。施設生活は外敵が最少となるように配慮されているので、ひとつめは容易に満たされます。ふたつめについて、母親と比べれば浅いが、複数の施設職員と心の交流は行われます。狭くて深いのがいいか、広くて浅いのがいいかの問題です。後者が前者より決定的に劣ることはないはず。このように考えて、施設職員は「親



代わり」の役割も果たさねばならないと思っています。

### ひかりの子の子ども同士の関わり

和田 彰

Aさん(横地分類A1、2歳7ヶ月)は、他児の動きや表情、遊んでいるところをよく見ていることがあります。Aさんは食べ物が出てくる絵本やままごとセットなどに興味があるようです。食材を切る、調理をする、盛りつける、分ける、食べる真似をするといった、ままごと遊びを通して他人とのやりとりをよく見えています。Bさん(横地分類B4、2歳0ヶ月)は、ままごとセットなどの玩具を使って職員とやりとりを繰り返すことがよくあります。しかし、



他児の動きや遊んでいるところにはあまり関心を示すことはありませんでした。そこでAさんとBさんと職員でままごとセットを使ってやりとりを行えるようにしました。BさんはAさんと職員と一緒に近づいてくることに気づくと、コップに注ぐ仕草や口元に運ぶ真似を職員にやって見せて笑っていました。それをAさんは、じつとよく見ていました。そのうちAさんのまなざしが強くなり、次第に腕や足に力が入ってきました。それは興味のある活動を行う時のAさんの表情に似ていました。そのため、職員が「Aさんもどうぞ。」とAさんの口元にコップを近づけました。すると、Aさんはコップをじつと

見て大きな口を開けていました。それを見ていたBさんが、今度はフォークを手に取り、自分の口元に運んでから、頬に両手を当てていました。これはBさんが食事の真似をする時のジェスチャーです。職員が「おいしい？」と声を掛けると、Bさんは嬉しそうに職員の顔を見て笑いました。それを見ていたAさんに職員が顔を合わせて声を掛けました。すると、BさんはAさんの口元にフォークを近づけて食べさせる真似をしました。AさんはBさんの行動が自分に向けられたことに気づくと、Bさんの顔を見ながら表情を緩ませていました。AさんとBさんは同じ興味あるものを介して、近い距離でお互いを意識しながらやりとりすることで、他児への関心がみられるようになりました。

